

ノラハザ

はらだいこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

山奥の洋館に定例会議のために集められた深層姉妹が音信不通となった。洋館内に異形の怪物たちが蠢く中、セバスタン見習い従井ノラはすべての深層姉妹を救出することができるとか……？

※バイオハザードを基盤にVtuberグループ深層姉妹が大暴れするお話です。オリジナル版、リメイク版などの要素が入り乱れております。

※前作とめハザの続編です。

※おぎやノラ貧困組+寧々丸がメインに話が進みます。るるるちゃんも活かしきれない博士設定で活躍します。

※pixivにも投稿しています。

深層7姉妹+セバスチャン見習い+養子

長女・DWU: <https://www.youtube.com/channel>

／UCSgheR9xOICQjIkeXqIofLQ

二女・ぶりり(卒業): <https://www.youtube.com/channel>

nel/UCQFDp9pt9CM952sBs08crfw

三女・なまほしちゃん: <https://www.youtube.com/channel>

nel/UCv5ndlKn|HNPySHp7mLlTTA

四女・クツコロ・セツ: <https://www.youtube.com/channel>

nel/UCTfDzAgNb|o5x2Ocemfc0Q

五女・息根とめる: <https://www.youtube.com/channel>

el/UCXYCBPWmFXbdTGD70eQe8zQ

六女・生返るるる(卒業): <https://www.youtube.com/channel>

annel/UC7yrCBpBQCCLT69s|vrqZw

七女・小夜城みるく: <https://www.youtube.com/channel>

nel/UCPYOimOwBfRzqZDXSgz2g

セバスチャン見習い・従井ノラ: <https://www.youtube.com>

／channel／UCQYy35PwwPpc6ImRHlTQgcw

見習いメイド：ぱーふえくとメイド：わからせえちよろ：<https://www.youtube.com/channel/UCQYy35PwwPpc6ImRHlTQgcw>

深層第一養子・寧々丸：<https://www.youtube.com/channel/UCx9yRTjbpUSlZAlHxdsxj4A>

目次

第一話	若セバス殉職	1
第二話	クレイモア地雷バブちゃん	6
第三話	緊急回避はバブにお任せ!!	14
第四話	痔には救急スプレー	18
第五話	おぎやノラサンドイツチ	22
第六話	貧乏神の真価	28
第七話	るるるSOS	34
第八話	赤子、疾る!	42
第九話	赤子VS大グモ	47
第十話	DWUの月光	54
第十一話	るるるビキニきた	60
第十二話	深層シャーク危機一髪!	67
第十三話	おぎやノラてえてえ	75
第十四話	捕らわれのノラ	84
第十五話	寧々丸のいないいないばあ!	89
第十六話	VSプラント42	96

第一話 若セバス殉職

10月30日 午後9時頃

「車が故障したから徒歩になるけど、大丈夫。私の後ろをついてきてもらえれば大丈夫です」

虫のざわめきと獣の雄たけびが木霊する鬱蒼とした森の中を従井ノラは散弾銃を構える若セバスの後ろを青い顔をしながらついていく。

ずううん……！

「ひい！なんですか今の音?!洋館の方から……爆発?」

犬耳状の癬毛の影響で常人の数倍の聴力が洋館の方角から聞こえる爆発音のようなモノを捉える。そばにまとわりつく貧乏神も怯えた顔を見せる。

「爆発?こんな山奥の洋館で定例会議なんておかしいと思っただけ何かのサブライズかな?ただでさえこのあたりで猟奇事件が起こったっていうのに、きな臭いな」

この山の近辺の民家で人間が無惨に食い殺されるといふ事件が数件起きていることと、山奥の不気味な雰囲気吞まれて見習い含め全セバスチャンに支給されるベレッタ F92S (セバスチャン)。カスタムの銃把を握る手にも力がこもる。

「ノラちゃん、大丈夫？一本吸って落ち着きなよ」

びくびくと怯えるノラの後ろからついてくる深層第一養子の寧々丸が、のんきに吹かしていたアイコスを緊張と恐怖でガチガチに固まったノラに差し出す。

「遠慮いたします……それよりもよく平気でいらっしやいますね」

「寧々丸鬼やし。こんくらいへっっちゃら」

自分より頭一つ以上高い長身の寧々丸の余裕に満ちた言葉に、ほんの少しだけノラは落ち着きを取り戻す。

「さすがは深層家のご令嬢。この従井ノラ、命がけでお守りいたします」

見習いの臆病の虫を追い出すべく、格好をつけてベレッタを構えたノラに若セバスから笑いが漏れる。

「頼もしいな。たとえ見習いでも心意気は一人前でなきや……それにしても先に到着した深層姉妹の方々との連絡も通じない。電波が悪いのか……?!」

その時、若セバスの目と鼻が異変を察知する。

「ま、まて！あ、あれは……」

鼻孔をつく血生臭い死臭。自分たちを取り囲む何者かの気配。草むらに横たわる“何か”を確認するべく若セバスが散弾銃を構え、息を殺して接近する。

「ひいいいっ！うわあああああつっ!!」

シヨットガンの下部に取り付けられたウエポンライトで照らし出されたのは骨まで見えた腕。骨格標本のように半分以上筋繊維維がむき出しになるまで噛みちぎられた顔面。それが同僚のセバスチャンと理解した時に若セバスは絶叫した。

わおん！うおおおん！

若セバスの声が犬笛になったかのように数頭のドーベルマンが森の中から若セバスめがけて疾走してくる。いずれも眼が白濁して、所々肉が腐り落ちて爛れており赤身が露出している。

「うわわっ！くるな！くるなあああっ！！」

ドン！ドンドンッ！ドンッ！

ポンプアクション式の散弾銃を異形の野犬の群れに乱射する。〇〇バック弾は野犬の肉をえぐり骨を砕くが、いずれも直撃とはならず、いたずらに接近を許してしまい一斉に飛び掛かかれる。

「ぎゃああつ！やめろおお！うわあああああつ！」

弾切れになった散弾銃をこん棒がわりにした必死の抵抗も虚しく、四方八方から飢え渴く牙の餌食となる。

「ノラちゃん！逃げろ！寧々丸お嬢様を……他のお嬢様を守って……！」

体中を噛み砕かれ血飛沫で真っ赤になった顔の中で強い意志を宿した視線がノラを

貫く。

「寧々丸お嬢様！こちらです！」

「若セバス！あんたの犠牲は忘れない！」

さらに野犬の遠吠えが聞え野犬の群れの第二派がノラと寧々丸を猛追する。ノラが寧々丸のしんがりを務め野犬をベレッタで狙撃する

バン！バン！バン！

「全然当たらない……！」

常時猛スピードで動くターゲットをハンドガンでとらえるのは至難の業である。しかも、怯えた貧乏神が周囲を飛び回って邪魔になる上に、異常状態で泡を食った状態なら当たる物も当たらない。十五発装填のマガジンはあつという間に空になる。

「ひいひい！もう弾切れ……うわあああつ！」

ドゴオオオ！

飛び掛かってくる野犬に死を覚悟したノラを救う一発の轟音。サバゲ好きの寧々丸が護身用に持参したカスタムリボルバー“シルバーサーペント”の44マグナム弾が野犬の頭部を木っ端みじんに粉碎する。

「ほら……っち！急いで！」

「申し訳ありません！寧々丸お嬢様！」

ノラよりもはるかに正確な射撃で野犬を一頭一頭仕留めていくが若セバスを満足いくまで食い散らかした野犬も殺到してキリも限りもない。

背中に背負った棺桶を野犬に投げつけて観音開きの扉に飛び込んだ。こうして従井ノラの長い夜が始まった……。

つづく

第二話 クレイモア地雷バブちゃん

10月30日 午後9時半頃 深層洋館 正面玄関ホール前

天井に輝くきらびやかなシャンデリア。毛先の長い赤い絨毯が続く階段を中心にした左右対称の建築様式は玄関をくぐった来訪者の心を一目で奪う。

しかし、そんな芸術的な洋館の内装に感動する余裕はノラには残されていない。毛先の長い赤絨毯の上でへなへなとへたり込み
嗚咽する。

「ひぐつ……ひつ！若セバス。そんな……」

まだ若くうかつな発言などもあったが、頼もしい先輩だった。それがこんな形で……。

「ノラちゃん。大丈夫？少し休む」

背中をさする寧々丸の角は引つ込んでいる。余裕な顔をしつつも緊張は隠せない。守るべき令嬢ですら気丈に振る舞っているのに見習いとはいえセバスチャンの自分がいつまでもよくよくしてはられないと、涙を拭って立ち上がる。

「いえ、平気です！若セバスから託されたお嬢様方の救出。必ず成し遂げて見せます

……！！」

涙を拭って気丈な顔で立ち上がるノラに食堂方面の探索を任せて寧々丸は二階の探索を担当する。

「わっ！お寿司い♥」

食堂の長テーブルに並ぶのは赤貝にぼたんえびに縁側など高級寿司の数々。洋館の雰囲気にはそぐわないと思いきやキラキラと輝くネタの数々はまるで宝石のよう。つい数時間前までここで定例会議と言う名の寿司パーティーが催される予定だったのだ。

「じゅるり……はっ！ダメダメ！お嬢様方の探索が先決！」

弾切れになったベレッタの代わりにサバイバルナイフを片手に館の探索を開始する。水を打ったような静寂の合間から、どこからともなく聞こえてくるうめき声や銃声が館内が尋常ではない事態であることをノラにまざまざと見せつけてくる。

「どういうこと？寿司の表面はそんなに乾いてなかったから少し前まで人がいたはず……それなに他のセバスもお嬢様方も一人も見当たらないなんて……」

闇雲に動いて若セバスの二の舞になるわけにはいかず、途方に暮れていると犬耳もとい癬毛が赤子の泣き声を捉えた。

「おんぎやあああつ！ばぶう！ふぎやあああつつ！！」

ハイハイで必死に逃げる赤子を知性のない白濁した眼球で認め、うめき声を上げなが

ら追うのは爛れた肉体に死臭を纏った生ける屍ーゾンビ。的が小さすぎる為、胃酸を吐き散らしながら執拗に追跡する。

「あれはみるくお嬢様！今、お助けいたします！」

廊下の曲がり角の向こうに消える深層7女の窮地に893の血が騒いだノラはナイフ一本で果敢にゾンビに立ち向かおうとしたその時、みるくを追ってゾンビが曲がり角を曲がると同時に、強烈な爆発音が鳴り響きゾンビが神のように吹っ飛んだ。

何故か白衣姿のゾンビの前身は一瞬で赤黒く染まりぼろ雑巾同然となり、床に仰向けに倒れ伏す。

「これは一体……」

さっきの泣き声が嘘のように不敵な笑みを浮かべて廊下の真ん中で小さい中指を立てる小城夜みるくをノラは抱え上げる。

「大丈夫ですか?!みるくお嬢様」

「だいじょーぶ。ノラちゃん。クレイモア地雷うまくいった」

みるくよりさらに廊下の先には三脚の上にスチール製の弁当箱のような長方形の箱が白煙を上げている。

「クレイモア地雷……有効射程まで誘導したんですね」

通常のクレイモア地雷の半分ほどの大きさの深層組謹製ミニチュア・クレイモア。小

柄さを活かして誤爆を防ぐ計算高さでゾンビ相手に臆さない豪胆さに改めて執事見習いとして敬意を払う。

「他の御姉妹型やセバスチャンの行方を知りませんか？」

「バブ、わかんない。気づいたら館中、ゾンビだらけになっとった」

おおおおお

クレイモア地雷の炸裂によって周囲のゾンビが集まり出した。ドアを叩く音、引きずるような足音にノラの血の気が一気に引く。

「ひええ。とりあえずおんぶ紐！あと武器もナイフ一本じゃ話にならない！」

みるくを抱えたままではろくに戦闘はできないと、あわてて食堂まで引き返す。

「ひええ……ナイフ一本じゃとてもしのぎ切れません……！」

「きやうくく♥」

途方に暮れるノラに抱えられたみるくがテーパーブルに所狭しと並べられた寿司に目を輝かせる。ぱたぱたと小さい両手をぱたぱたと動かす可愛らしい姿にノラの理性が飛んだ。

「ふうおおああああああつ！みるく！みるく！みるくみるく！」

原神配信のように警察を呼ばれる心配こそないが、ノラの奇声にぎよつとするみるくの頭頂部のちよんまげを卑しい音を立てておしゃぶりのようにすすり上げる。

ぶちゆるっ♥じゆるるるるっ♥じゅちゆるるるるるるるるるるるっ♥♥♥♥
 「うきやあああつー!」

涙目になって変質者と化したノラから逃れようとするが、バブシコ状態となったノラの魔手からは逃れられない。

おおおおおつ……!

ノラが狂っている間、食堂に侵入したゾンビがノラににじり寄る。クレイモアの起爆とノラの奇声を聞きつけて寧々丸が食堂に駆け付けた。

「あつ!ノラちゃん、てつ、何してんの!ほら後ろ後ろ!」

「寧々丸お嬢様!?後ろ……いやあああああああああつっつ!!!」

「ふぎやああああああん!!!」

寧々丸の声にはつと我に返ったノラは、みるくに夢中で肩に手が届きそうなほどに接近しているゾンビに気づくとかかな切り声を上げて泡を食ってほうほうの体で逃げ出す。

「うわっ!めっちゃうるせー!」

ノラの絶叫とみるくのギャン泣きに呆れた寧々丸はわりかし冷静にゾンビにマグナムの狙いを定める。

ズドン!

「うお!一発じゃ止まんねーし!これならどーだ!おりゃー!」

強力無比な44マグナム弾の直撃を耐えたゾンビは寧々丸にターゲットを変えてにじり寄る。寧々丸は改めて照準を合わせて二発お見舞いする。

ズドン！ズドン！

生ける屍もマグナム弾3発の直撃には耐えられず、今度こそ絶命して今度こそただの屍になるゾンビだが、マグナム

弾の直撃で破砕した肉片や血煙、臓物が寿司に盛大にトッピングされ見るに堪えない惨状。

「はあはあはあ、助かりました。！みるくお嬢様?!」

「あつあつあつ！お寿司……たびりない……！ふぎやあああん！」

ぐずりだしたみるくにオロオロする見習いらしい情けない姿のノラが見ていられずゾンビの肉片スプリングクラーを免れた赤貝の寿司を口に含むと適度に咀嚼する。

「バブちゃん、あーん」

「?!あーん」

なかなか泣き止まない子供に飴を与えるようにみるくのおしやぶりを取りぬいて赤貝を口移しで食べさせる寧々丸にまたしてもノラの理性が飛ぶ。

「ほあおお！バブノラてえてえ！てえてえ！」

興奮のあまり今度は寧々丸の髪を舐めようと飛び掛かってくるノラをさっと躲すと、

赤貝の味に夢見心地のみるくにおしやぶりを返す。

「たうとう♥赤貝……おいちい……♥」

大好きな寿司ネタにぼおーと頬に赤味がさし、赤貝のぷりぷりの感触をおしやぶりをちゆうちゆうと吸って反芻するみるくの頭を撫で擦り、寧々丸ははにかむ。

「ははは。現金だね」

「ありがとうございます。ボク一人ならどうなっていたか……」

「気にすんなって。それより、これ上げる」

寧々丸が差しだしてきたのはベレッタの弾倉が二つとダガーナイフ一本。ナイフ一本で丸腰に近いノラにはまさに砂漠で口にする水の一杯のようなありがたさ。

「感謝します！これでみるくお嬢様をお守りできます」

ベレッタに弾を込め、ダガーナイフを懐に収める姿を見ながら、寧々丸はアイコスを吸って気分を落ち着ける。

「ふう、この状況で吸っても経費とか殿のかなあ」

「ボクが愛妻家セバスに掛け合ってみます」

「サンキュ。それじゃ探索に戻ろっか。早くみんなの顔見たいし」

セバスチャン見習いと深層第一養子。立場は違えど深層家に対する思いは一緒。決して一人ではないとノラは力強く頷き返す。

「はい！御武運を！お嬢様方を助け出して！一緒に寿司パです！」

横顔に笑みを浮かべた寧々丸は食堂を後にする姿を見送り、自分も探索に戻ろうとしたところで玄関ホールの方からわずかながら異質な唸り声が耳に届き旋律が走る。

うううううううううううう……！

「ひいひい……今度はなんなんですかあ……！」

若い女の声だが苦悶に満ちた地を這うような声にノラはゾツとして駆け足で食堂を去った。

つづく

第三話 緊急回避はバブにお任せ!!

10月30日 午後10時頃 深層洋館 1F 衣裳部屋

ノラの尻尾が歡喜でぶんぶんと左右に揺れる。透過するとはいえ、いちいち尻尾があたりるのが不快なのか、尻尾にあたらないように貧乏神がそそとノラから距離を置く。

「赤子の体温がじいじいんわり♥じわじわしみ込んでくる♥秋の夜長に赤子湯たんぼ♥ たつまんなーい♥ほわあああああ♥♥」

寧々丸から貰った洋館1階の地図を頼りに辿り着いた美術室のクローゼットからおんぶ紐を入手したノラはみるくを背負う。抱っこ紐もあつたがちよんまげを吸い上げられたことがトラウマになったみるくに断固拒否されたため、びんぼつちやませスタイルで剥き出しの背中への地肌を赤子の体温を直に感じることができぬ。

「……」

ハイテンション過ぎて気持ちの悪いリアクションのノラにみるくは養豚場の豚を見るような冷たい目になるが、おんぶあさされて視線が合わない上、有頂天のノラはどこ吹く風。

「やっぱり守るべきものが背中に感じると奮い立ちますね。みるくお嬢様はこの従井ノ

ラが必ず守りします！」

意気揚々とベレッタを構え、他の深層姉妹の救出のためゾンビが徘徊する洋館の探索を開始するノラ。しかし、脅威となるのはなにもゾンビだけではない。

「おおっ……こんなところにベレッタのマガジンが！」

通路にある木製の棚を動かすと下からベレッタのマガジンを見つけ、懐に収めていく。弾丸だけでなく骨董品ののタイプライターに使うインクリボンや、アメリカ南西部のアークレイ山脈に自生する各種ハーブなどが何故かゴロゴロと転がっている。

「調べれば調べるほど奇妙な洋館ですね。みるくお嬢様。でも、これで大分、弾に余裕が……あああああああああああああああああああつっつ!!!」

がしやーん！

通路の窓ガラスが唐突に破られ、若セバスを食い殺したゾンビ犬“ケルベロス”が洋館内に侵入してきた。

「わあああああああああつっ！やあああああああつっ!!!」

「ぎやあああああああつ!!」

がしやーん！

絶叫して逃げるノラとみるくの退路を断つように窓ガラスを割ってもう一匹侵入。挟み撃ちにされたノラは止むえず抗戦

する。

「うわああああっ！くるなああああああああああつっつ!!」

バン！バンバンツ！バン！バン！

狭い通路ということでケルベロスの機動力は制限されるが的が小さいうえ、泡喰ったノラはあつという間に弾倉の弾丸を使い切ってしまう。

「よ、よし、一匹仕留めた！ちよ、ちよつと待つてえええええええええええつっ!!」

最後の一発でケルベロスの一匹を仕留めたまでは良かったものの、リロードの際にケルベロスに飛び掛かられてしまう。

(ダメ！仰向けに倒れると……!)

仰向けに倒れると背負ったみるくを押しつぶしてしまうと、無理矢理に尻もちをついて肛門を強打したことにより、日頃より悪化していた痔が裂けて激痛がノラの背筋を貫く。

「いぎやあああ！わ、このお！」

バウツ！バウバウツ!!

咄嗟に弾切れのベレッタを投げ出し、ナイフを構えるもケルベロスの牙から身を守るので精一杯。背中のみるくを庇った状態で抵抗に限界が来たその時

「たやう！」

ドスリ!

ノラがサイドアームとして所持していたダガーナイフを手に取ると、ケルベロスの眉間に躊躇なくぶつ差す。

「ないすです!・みるくお嬢様!」

頭部をダガーナイフで貫かれて怯んだ隙を見逃さずに、ケルベロスの喉笛をサバイバルナイフでかき切ってケルベロス絶命にいたらしめる。

「ありがとうございます!・みるくお嬢様あ〜」

「ノラちゃん、無事でよかった。お尻だいじょうび?」

「お尻?・いててっ!・痔が裂けちゃいました。これは洒落にならない……一刻も早く治療しないと探索どこじや……」

ケルベロスとの戦闘以上のダメージを負った痔の患部に薬を塗るべく、安全に痔の薬を塗る場所を求めてよたよたと立ち上がった。

つづく

第四話 痔には救急スプレー

10月30日 午後10時半頃 深層洋館 1F 物置

ケルベロスとの戦闘による痔の出血で走ることもままならないノラは逃げるように物置部屋に駆け込んだ。

ぷしゅうううう！

「あああ〜♥みるくお嬢さまあん♥そこ♥そこですううっ♥」

物置部屋に寧々丸からのプレゼントという書置きと共に置いてあったアンブレラ製の救急スプレーを吹き付けてもらい夢見心地のノラ。気色の悪い喘ぎ声を上げながら、ぶんぶんとして左右に動く尻尾が顔に当たり、眉根を寄せるみるくにお構いなしにノラは快感に悶え続ける。

「ふう、ありがとうございます。みるくお嬢様」

救急スプレーは効果できめんで痔の出血は止まり、痛痒感が引き、体調は以前よりむしろ改善した。

「どーいたちまちてー」

「寧々丸お嬢様といい、助けてもらってばかりでボクはまだまだ未熟です」

自分の不甲斐なさに肩を落とす時間も惜しいと、痔の問題がどうか解決したノラは再びみるくを背負うと、ケルベロスとの戦闘で空になったマガジンを変える。

「正直、あのゾンビたちに、ベレッタじゃパワー不足ですね。何か新しい武器が欲しいですね」

「バブも新しい武器、ほし〜」

「そうですねー。みるくお嬢様にも手榴弾とか持たせてあげたいですねー」

新しいダガーナイフを構えて、戦意十分なみるくに勇気づけられたノラはゾンビの徘徊する洋館の探索を再開した。

うおおおおお………！

バンバン！バンバンバン！

つんざく銃声に貧乏神が怯えてノラの背に隠れる。二階に上がったノラは廊下の角に隠れてゾンビをベレッタで狙撃する。

しかし、ゾンビに致命傷を与えられる頭部への狙撃はうまくいかず二発は一発は外してしまいう上、胴体を狙おうにも十メートル近く離れての狙撃では空気抵抗で弾丸の威力が削がれてしまい掃討に難儀する。

「ふう、一度に二体以上出るパターンが一番きついですねー」

ゾンビがすべて床に倒れたとみて不用意にまたいで通ろうとしたノラの手首を完全

に絶命していなかったゾンビが驚掴みにする。

「まだ生きてるうううつつ!! いやあああああああああああああつつつ!!!」

「ぴきやあああああああああああああああつつ」

警察が呼ばれるほどの絶叫にみるくも釣られて泣き叫ぶ。ふくらはぎに噛みつきうとするゾンビを固い革靴の底で蹴ってひるませて、至近距離でベレッタを連射して頭部に集中砲火を加える。

バンバンバンツ!バン!バンバン!

既に頭部がミンチ状になったにも関わらず打ち続けあつという間に弾切れになる。

「あちゃー、また撃ちすぎちゃったもうマガジンがもうないですー……う……どうしました」
貧乏神がじつと床に転がったゾンビを凝視している。常に怯えて役に立たない貧乏神にしては珍しいとノラも視線を移してみる。

「肌が赤く……気のせい?」

血の気のない青白い肌がほんのりと赤身が差しているように見える。

「気味が悪いですね……早く行きましょう」

念のため頭部に一発撃ち込んでおこうと思ったが弾に余裕がないとその場を後にする。完全に止めを差さなかったことをほどなくしてノラは後悔することになる。

第五話 おぎやノラサンドイツチ

10月30日 午後11時頃 深層洋館 1F廊下

どこから湧いてくるか分らないゾンビもそうだが、日常生活に支障が出るレベルの珍妙な仕掛けの数々にノラは辟易していた。

「それにしても意味の分からない仕掛けだらけ……この剣のカギとかクレストってなに？女神像の水瓶に地図が入ってるってどういうこと？」

アメリカの著名な建築家ジョージ・トレバーの建築を模倣したと言うが、こんなからくり屋敷を用意するセバスタンたちに改めてえらい箱に入ったとノラは頭を抱える。

「ほんと欠陥建築ですよー。みるくお嬢様」

「ぶうううううっ！謎解きたのちー」

ゾンビにも慣れ、知的好奇心旺盛な赤子にノラは苦笑。やはり複数のゾンビ相手にはベレッタではパワー不足、そろそろ、強い武器がほしい。

おおおおおおお………！

ああああああ………！

「わっ！わああっ！またゾンビいいい！」

廊下の曲がり角からゾンビのうめき声にノラの顔が青ざめる。右往左往するノラとは違い、二頭身ボディでもどつしりと構えているみるくは手頃な避難場所を指示する。

「きやう！ノラちゃん、あっちあっちいー！」

みるくの小さな指が差すドアに泡を食ったノラは言われるがままに駆け込んだ。

「えっ！この部屋……なんなのこの“間”？」

ノラが滑り込むように入った部屋は八畳ほどの広さで調度品の類が全くない、正方形の殺風景な空間。

「たう！なんかあやちー」

むむと眉根を寄せる赤子にノラは同意して顎を親指で顎を扱く。

「確かに胡散臭いですね……あそこにドアがありますよ」

斜め向かいにあるドアを開けると今度は打って変わって高価なテーブルや椅子、調度品がある応接間。壁を見るとラックに掛けてあるショットガンを見つけ、ノラの瞳にぱつと煌めいた。

「きやあああつ！みるくお嬢様！ショットガン！これショットガンですよー！」

待ち望んだ高火力の武器に感激したノラはすぐ様手に取るが、ラックが上がりガコンと何かのスイッチが入ったような、音が聞こえる。

「ん？なに今の？」

思わず身構えるノラだが特に異変はない。気のせいかとさっそくショットガンの動作確認を行う。

「わあーい！ショットガン！げつとー！ふうううい！」

「そうですね！ショットガンGET！」

ベレー帽を被つてどこか猟師然とした姿のノラがショットガンを構えた姿は様になつている。

「きやうー！ノラちゃん、格好いい〜！」

「ありがとうございます！これでゾンビの群れも一網打尽です！」

意気揚々と部屋を出た瞬間、ゴゴゴゴと地響きが鳴り響く。

「うぎやああああ！何々?!」

天井を見ればゆっくりと下降してきていて、このままではノラとみるくを押し潰されてしまう

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「そんな、ドアが開かない……………」

部屋を出ようとしたらドアにロックが掛かっている。ショットガンが仕掛けのトリガーになつていると勘づき戻そうとしても応接間へのドアにもロックがかかっている袋の鼠。

「うわあああああん！ママア〜!!」

みるくがギャン泣きしてノラの背中で暴れる。気づけばもう目と鼻の先にまで天井が迫っている。貧乏神は我先にと部屋の外にすり抜けて逃げだした。

「ノラちゃん！オギヤちゃん！そこにいんの？」

ドアの向こうから鼻にかかったしやがれ声。右往左往するノラが藁にも縋る思いで必死にドアを叩き助けを乞う。

「寧々丸お嬢様！ここです！ドアが開かないんです！」

「ちよつと離れてて、今、このドアぶち破っから！」

ドガン！ドガン！

44口径のマグナム弾はドアノブを粉々に破壊してドアを解放する。迫る天井から逃れるために床に四つん這いになったノラの手を取って強引に引きずり出した。

ずうううん！

間一髪でダメ執事見習いと末っ子を救い出して、寧々丸は角が引つ込んで平らな額に浮いた汗を拭う。

「いやあー、危なかつたあー。あやうくおぎやノラサンドイツチが出来上がるとこだったね」

文字通りの窮地を脱したノラとミルクは涙と鼻水塗れの顔で寧々丸に抱き付く。

「ありがとうございますううう！ねねまるうお嬢様〜」

「寧々丸ちゃん、ありがとうございますおおお！」

（か、可愛い……♥）

頭一つほど小さいノラの弱弱い姿に思わず首筋に噛みつきたい衝動に駆られるがグツと堪える。さらにその後このまま抱きしめてノラを鯖折りにしてやりたい衝動が鎌首をもたげるがそれも堪えて、優しく抱きしめてノラとみるくを慰める。

「よしよし、もう大丈夫大丈夫」

寧々丸の花のような体臭に包まれると徐々に気分がリラックスしてくる。みるくは泣きつかれてうとうとうとと舟を漕ぐ。

「？そういえばものすごい偶然ですね。寧々丸お嬢様はボクたちと逆方向を探索していたはずでは」

あまりに出来過ぎた救出劇にノラが首をかしげると寧々丸の視線が不自然に泳ぐ。

「まあ、あれよ。その貧乏神が寧々丸を呼びに来たんよ」

自分たちを見捨てて逃げたと思っていた貧乏神への信頼が首の皮一枚で回復した。

「なんだそーいうことだったんですか、ボクたちを置いて逃げたんだからどうお仕置きしてやろうかと思ってましたよ」

貧乏神がえへんと胸を張ったように見えたがどこか自信がない。

「ほいじや、寧々丸はここで一服してくから、ノラちゃんも頑張つてね。オギヤちゃんの
こと頼んだよ」

「はい！お嬢様方の探索！この従井ノラにお任せ下さい！」

「むにやむにや、寧々丸ちゃんいい匂い……」

ビシつと敬礼したノラが入手したばかりのショットガンを構えて去っていくノラの
姿を見送りながらI q o sを胸いつぱいに吹かして紫煙を吐き出す。

「……ごめんね。ノラちゃん、オギヤちゃん。今は“あいつ”の言いなりになるしかな
いんよ」

つづく

第六話 貧乏神の真価

10月30日 午後11半時頃 深層洋館 ホール2F

理性の光を失った目でホールの二階をぐるぐる徘徊していたゾンビが若く柔らかい肉の匂いにうめき声を上げながら足を進める。

「ノラちゃん、まだ、あとしゅこし、あとしゅこしー！」

みるくがノラの背中でダガーナイフを構え、固唾を飲んで見守る。ショットガンを構えたノラが深呼吸をして手を伸ばし、半開きにした口から涎を滴らせたゾンビの頭部に慎重に狙いを定める。

「1、2の……3！今だ！」

バオン！

掛け声とともにノラが引き金を引くと散弾がショットガンの銃口から解き放たれる。散弾が拡散仕切る前の絶妙な距離感ですべての散弾がゾンビの頭部に吸い込まれる。

頭部が綺麗に血の霧となって砕け散り、ゾンビは一瞬その場に立ち尽くすと、膝をついてその場に倒れた。

「ジャストミートーきんもおちい〜〜！」

「ぶいいいい！ノラちゃん、ナイスー！」

ベレッタとは違い一発でゾンビを倒す快感にノラは酔いしれる。スライドさせて排莖して、2階の東側を探索

している森を一望できるテラスにたどり着いた。

「なにあのカラス……不気味」

木々の梢から目を血走らせた数羽のカラスがノラとみるくを値踏みするようにぎよろりと視線を向けてくる。

「じつとこつち見てりゆ。こわーい」

「かあー！かあー！かあー！」

「大丈夫ですよ。ショットガンでミンチにしてやります」

洋館はそこかしこに武器弾薬が点在しているので初めて入った部屋はくまなく探索する癖がついている。ノラの視線がテラスの奥の椅子に座る人影を認める。

「えっ！あ、あれって……！」

ポリウム満点の縦ロールツインテール。紫色のドレス。立派なお胸、我らが深層家長女デイープウエブ・アンダーグラウンドその人だった。

「DWUお嬢様!?大丈夫ですか」

「うっ！ノラ……ですの」

目を覚ましうつすらと眼を開けたDWUの額からは血が流れ、ドレスは所々が破けている。熾烈な戦いを繰り広げてきたことが伺える。

「気を着けなさい……あいつらが……」

「えっ！なにっ!?!うわああああああっ!!」

ばさばさばさばさっ!

新しい獲物と見定めたノラにカラスがTウィルスに感染して変異したクリーチャー“クロウ”。が死の風となつてノラに一斉に襲い掛かる。

「うわあああああつ!くるなああああ!」

ばおん!ばおん!ばおん!ばおん!ばおん!

ノラは顔を真っ青にしてショットガンを乱射する。散弾のため多少狙いが甘くてもクロウに命中してハエの様に落ちていくがあつという間に7発を撃ち尽くしたノラに残りの数匹が襲い掛かる。

「ちよ!きやあああああつ!」

弾ギレになつたショットガンを捨てて、ベレッタを構えようとするも周囲を取り囲まれてしまう。

「やだあああああああつ!ママ!ママッ!」

四方八方からのくちばしによる攻撃。みるくは頭のちよんまげをつつかれ悲鳴を上

げる。

「み、みるくお嬢様！」

「二人とも！伏せなさい！闇の呼吸一の型！」

DWUは満身創痍のみで長女味を発揮して腰に佩いていた深剣アングラディウスを取り出し闇のオーラを纏った刀身を一閃してクロウの群れを殲滅する。

「かはっ……！」

この一撃ですべての力を使い果たしたDWUは床に崩れ落ちる。

「大丈夫ですか?!DWUお嬢様！」

「DWUおねーちゃん！死なないでー！」

「大丈夫ですわ……でも、もう動けな……！」

今のおぎやノラコンビに重症のDWUを守りながら洋館の探索を続ける余力はない。途方に暮れているとノラの周りにうっとうしくまとわりついていた貧乏神が風船のように膨らみ始めた。

「わー！オービィー！」

「どうしたんですか、いきなり……あああああああ!!!」

貧乏神が一頭身の食いしん坊キャラのようにDWUを吸い込み身体に収めてしまう。

「なにお嬢様のこと食べてんですか！早く吐き出し……えっ！」

銃を向けるノラに貧乏神が慌てて身振り手振りで自分の口は異空間に繋がっていること、異空間にいるうちは少しずつだが身体が治癒していくことを聞いてノラは銃を下ろした。

「なんと！それはありがたい！今まで役立たずだとしか思っていませんでしたけど意外な取り柄があるんだあ」

「ぶいあ！DWUゲットだぜえ！」

珍しく貧乏神に感心したノラはDWUが座っていた椅子の近くに落ちていたグレネードランチャーに今更気付いて飛びつくがゾンビとの激戦で故障して使って使うことができない。

「弾はみかけてたんですけど、残念。これも異空間にしまえるー？」

頷いた貧乏神の口に故障したグレネードランチャーを突っ込むと死屍累々とクロウの死骸が転がるテラスを後にする。

「機会に強い深層姉妹がいれば助かるなー。るるるお嬢様とか……えっ！あれは、ひよっとして！」

再び2階ホールに戻ってくるとブリキのおもちやを連想させる三頭身ボディのロボットが中空を小さなプロペラを回して飛行している。深層六女るるる博士の相棒“なめこたろう”であった。

第七話 るるるSOS

10月31日 午前12時半頃 深層洋館 玄関ホール

なめこたろうにばったりと遭遇したノラとみるくは何故かゾンビがよりつかない玄関ホールで詳しく話を聞くことにした。

「……ノラたん、バブちゃ……るーは今……」

なめこたろうのボディの小さなモニターにるるの顔が映し出されているが、通信が切れ切れて音声にもノイズが混じる。

「電波が悪いのかな？聞き取りづらいですね」

「るるるちゃーん!!無事でよかつちゃ」

かろうじて聞き取れたるるの話をもとめると、他の深層姉妹に先んじて寄宿舎の下見にきたるるは洋館の異変に気付きゾンビの群れから辛うじて逃れることができたらしい。しかし、籠城した場所から身動きが取れない。

突然、洋館に湧いて出たゾンビや化物との戦いによる混乱で深層姉妹やセバスチャンたちは散り散りになり分断された、DWUの他にクツコロは深層洋館本館にいるらしいが、なまほしちゃんやとめるはゾンビの発生源と思わしき、謎の地下施設に向かい消息

不明。

「……もう、なめこ……たる……動力源が……切れ……」

なめこたろうは深層洋館を探索するためにずっと稼働させていたため、動力源である単三電池四本の電力が底を尽き動力を維持することをできない。

「待つてください！…るるるお嬢様！」

「るーのことは後回しでいいから……セツちゃんをたすけ……」

DWUを助けるためにゾンビとは比べ物にならないほど強力なクリーチャーとの戦いで負傷したという、クツコロの位置情報を映すと完全にモニターが切れ、プロペラが止まったなめこたろうがへろへろと地面に落下する。

「るるるお嬢様の言うように、セツちゃんの探索を優先した方がいいですね」

「たやう！セツちゃん助けりゆ！」

稼働を停止したなめこたろうを貧乏神に飲み込ませると、一刻の猶予もないとセツの元へと急行する。るるるが指定した2Fの屋根裏部屋前の廊下にはクツコロ・セツが方から胸部部にかけて巨大生物の噛み傷から血を流して倒れていた。

「うわあああつ！セツお嬢様！」

「うああああああん！セツちゃんーん！」

セツの無惨な姿にみるとノラが悲鳴を上げると、セツがうつすらと眼を開ける。

「ノラちゃんにオギャちゃん……？かはっ!!」

咄嗟に起き上がろうとして傷が痛み、声もなく呻く。ノラは大慌てで救急スプレーを傷口に吹き掛けるがあまりにも傷が深すぎる。止血するためのガーゼや包帯が必要だ。

「なんか知らんけど、蛇の化物と戦って毒貰っちゃった……血清……お願い!」

セツ愛用の両刃剣も半ばから折れていて、堅牢な籠手や脚甲も傷だらけで怪物との戦いの熾烈さを物語っている。

「血清ですね!分かりました!」

血清のありそうな場所を手当たり次第に探す過程で今までの戦闘で倒してきたゾンビたちの中に肌の色が真つ赤に染まっている個体を認めてぎよつとする。

「えええっ!な、何これ!キモッ!やっぱり見間違いないやなかった!」

真つ赤なゾンビは過去に警察沙汰になったノラの甲高い悲鳴に反応してぴくりと指先が動く、むくりと起き上がり、白濁した瞳をノラとみるくに向ける。ゾンビの変異体クリムゾン・ヘッド。変わったのは肌の色だけではない。爪は小ぶりの鎌ほどの長さに伸び、より戦闘向けのな身体に“進化”している。

おおおおおおおつ!

姿勢は低く、ゾンビの緩慢な動きとは比べ物にならない機敏なノラとミルクに襲い掛かる。

「いやあああああああああああああつっ!!!!くるなああああああつっ!!」
「きやあああああああああ!」

バオン!バオン!バオン!

泡を食って乱射した散弾はクリムゾン・ヘッドを怯ませるが耐久力が増している上、
急所に命中しない限りは微動だにせず、すぐさまノラに肉薄する。

バキヤツ!

狭い廊下では到底避け切れず、ショットガンでクリムゾン・ヘッドの渾身の爪の一撃
を受けるとショットガンがくの字に曲がる。

「ひいひい!犯さる!食われる!」

細胞が再活性化したことで代謝が激しくなった肉体を維持するためにノラの柔肌に嘯
みつこうとするクリムゾン・ヘッドと取っ組み合いとなるノラの背中からみるくは洋館
で見つけた閃光手榴弾を涎をし断たせる口に強引にねじり込む。

「たやう!」

ずむんっ!

「みるくお嬢様!ナイスです」

バン!

一瞬、ひるんだ隙にノラがクリムゾン・ヘッドを突き飛ばし、間髪入れずにベレッタ

を構えて9mmパラベラム弾を閃光手榴弾に叩き込んだ。

ギイイイイイイーン!

凄まじい閃光とともにクリムゾンヘッドの口腔内で閃光手榴弾が炸裂する。

首から上が消し飛ばせば最早死ぬしかなくクリムゾン・ヘッドはその場に立ち尽くし、数秒の間を置いてうつ伏せに崩れ落ちた。

「あ、ありがとうございます！・みるくお嬢様あ」

「えへん！お礼はとんこつラーメンでええよー」

「あーあ、ショットガン壊れちゃった」

吊り天井の部屋で命がけで手に入れた新武器の寿命の短さに弾行きをつきながらがらくたと化したショットガンを名残惜しそうに投げ捨て一回に降りると寧々丸がゾンビの死体を何重にも重ねてなにかやっている。

「ああ、ノラっちにオギャちゃん、上で派手にやり合ってたみたいだけど、大丈夫ぞ？」
集めたゾンビの死体の山に灯油をどばどばと掛けた寧々丸は一仕事終えたという顔でIqosではなくアメリカン・スピリットを啜る。

「はい、なんとか切り抜けましたよー！それより聞いてください！一度倒したゾンビが復活して襲い掛かってきたんですよー！」

「あー、なんか赤くなるあれっしょ。めっちゃ動き早くてビビるよね」

懐から取り出したジツポライターでアメリカン・スピリットに火をつけると胸いっばいに吹かして紫煙を吐き出す。

「頭ふつとぼすか、こうやって焼いとかないと蘇るっばいから注意しんとね」

火のついた煙草をゾンビの死体の山に放るとキャンプファイアーが始まる。

「へへ、こうやってまとめて焼けば手間が省けるってもんよ」

「なんかゾンビの山だけきれいに焼きましたね！ほかに燃え移らない」

「ぶえー！焦げ臭ちゃーい！」

ただの灯油とは思えない圧倒的な燃焼速度でゾンビを焼き尽くして、あつという間に鎮火。背中の赤子が口をへの字にして鼻をつまんでいるとはつと自分の使命を思い出す。

「そうですそうです！セツお嬢様のために血清を探さなきゃいけないんです！」

「血清？この灯油のあった物置の隣の保管室？になんかそれっばいのあったよ」

思わぬ寧々丸の言葉に一縷の望みをかけて保管室に直行。ベッドや各種医療品など簡易な保健室のような内装。

「これはおあつらえ向きな……」

「……ならセツちゃんが安心してねんねできる！」

医薬品の棚を徹底的に漁ると血清を発見。ゾンビに察知されるリスクなど気にせず

狂喜乱舞する。

「やったあああああつ！見つけましたよー！」

「はあい！ノラちゃんお手柄あー！」

「血清見つけた？オギヤちゃん、これ、拾ったやつだからあげる」

意気揚々と保管室を出てきたおぎやノラに寧々丸はダガーナイフや閃光手榴弾、スタングンというサブウェポンをみるくに渡す。

「寧々丸ちゃん！ありがちよー！これでゾンビ何てイチコロー！」

赤子とは思えない手さばきでダガーナイフや手榴弾を小さい手で弄ぶとおんぶ紐の横に引っ掛ける。

「よかったですねえ。みるくお嬢様」

「いいってことよ。ほら、クツコロちゃんのとこに行つてやりな」

寧々丸の元に大急ぎで駆け付け、さっそく手当を開始した。深層組でも屈指のサイズのお胸で急所をガードしたので致命傷には至っていない。

「ふう、こんなものですかね。見習い執事として医療研修を受けていてよかったです」

血清を投与してガーゼで止血、包帯で患部を覆うと苦しげだったクツコロの表情が次第に穏やかになる。

「二人ともありがとう。助かった……」

「セツちゃん助かってよかつちやあああ」

みるくがおんぶ紐から抜け出し、セツの傷ついた胸を撫で回し吸って慰める。赤子のボディゆえに許されるどさくさ紛れのセクハラなどでは断じてない。

「そうだ。ノラちゃん。これ……持つてって」

セツは自分の横に立てかけて置いたアサルト・ショットガンを手渡す。ショットガンを損失していたノラにとつてはまさに渡りに船。相談数は10発と以前のショットガン以上の火力が頼もしい。

「ありがとうございます。セツお嬢様の柔肌を傷つけた毒蛇はどこに？」

「屋根裏部屋に……いる。無理しちゃダメだよ」

「クソ蛇の鎌首ふつとばしてやりますよ！」

思わぬ新武器にすっかり気持ち大きくなったノラは意気揚々と屋根裏部屋のドアを開けた。

つづく

第八話 赤子、疾る!

ノラが屋根裏部屋に足を踏み入れると部屋の奥にある暖炉から巨体には似合わない俊敏さで大蛇のB・O・Wヨーンが現れ、鎌首をもたげる。名前の語源ともなったあくびをするようにノラとみるく程度なら一呑みに出来るほど大きく口を開けると唾液の糸が口腔に無数に引く様を見てアサルトショットガンを手にして気が大きくなっていたノラの顔はたちまち真つ青になり甲高い悲鳴が放たれる。

「いやあああつ!ちよつとでかい!なにあれ!うわあああつ!きたあああ!!!」
「わあああ!わあ!ママ!ママツツ!」

しやああああああああああつ!!

想像の倍以上の大きさのヨーンが威嚇しながら襲いかかってきたので、さつそく泡を食ってショットガンを乱射する。

バオン!バオン!バオン!バオン!バオン!

通常のショットガンよりも銃身が長いため集団性に優れるアサルトショットガンはヨーンのカエルのような滑りに覆われた皮膚を削るも、野太い胴体を貫通することはできず、考えなしの連射であつというまに弾を使い果たしてしまう。

「ノラちゃん落ち着いてえ！あいつは小回りが利かないみたいだから、とにかく距離をとって！」

冷静沈着な背中の子の指示に従い弾を込めながら距離を置くも、狭く障害物も多い屋根裏部屋では巨体ながら狭い場所にも入り込めるヨーンが圧倒的に優位だ。

しやああああああああつ！！

鎌首をもたげて大型のナイフよりも鋭利な牙を剥き出しにしてヨーンは突っ込んでくる。ノラは咄嗟に横に飛んで躲すが牙の先端がふくらはぎを掠めて血の飛沫が上がる。

「いやあああああ!!血がああああつ！」

傷の深さの割に出血が激しく気が動転したノラの両頬の肉を後ろからむんずと驚掴んでにゅつと伸ばす。

「ひりゆくおひようひやま?!」

「ノラちゃん！灯油であの蛇ちゃん丸焦げにするんだよお！」

ノラの首をぐいと45度動かした先には灯油缶。この館の灯油は通常の灯油とは異なり急激に燃焼してすぐに鎮火する。可燃性の液体の良いとこどりを利用しない手はない。

「やってみましょう！みるくお嬢様！」

「ぶえ！衝撃が貫通……！」

野太い身体をのた打ち回らせた余波でノラを弾き飛ばすと、暖炉に撤退していく。

「はあはあ、なんとかやりましたね……みるくお嬢様」

「ふうふう！おぎやノラは無敵よ！」

ヨーンが消えた暖炉の前で月の描かれたクレストを入手する。

「また変なのを拾いましたよ。まったくこの洋館はこんなものばかりですね」

「ノラちゃん、それより足のケガ、だいじょうび？」

「あつ！そうだすつかり忘れてた！いたた、意識したらまた痛み出してきた……」

ヨーンの鋭利な牙に深々と抉られ、出血が続いていた足の傷を包帯で止血して屋根裏部屋を出ると、ノラの体調に異変が起きた。

「えっ！あ、あれ、眩暈が……」

くらつと立ち眩みを起こしたとおもったらもう立ってられない。膝から崩れ落ちてそのまま仰向けに昏倒する。

「ノラちゃん！ノラちゃん！わああああああん！」

ノラの体調の急変にみるくは泣き叫ぶ。みるくをあやすために右手でみるくのぶよぶよしたちよんまげを撫で擦る。

「みるくお嬢様……わたしのことはいいです……寧々丸お嬢様に助けを……」

「ひぐっ！ひっ！待っててノラちゃん！今、血清を持つてくるよ！」

ノラの額には脂汗が浮かびひどい熱だ。セツは血清が効いたのかぐっすりと寝ておりみるくの鳴き声を聞いても眼を覚まさない。意識を失ったノラを助けられうのは自分しかない。涙と鼻水を拭い、おんぶ紐から抜け出すと、さっそく得意の高速ハイハイを披露した。

つづく

第九話 赤子VS大グモ

10月31日 午前1時半頃 深層洋館 2階廊下

漂ってきたミルクのような甘く柔らかい肉の匂いに、洋館の廊下で呆然と立ち尽くしてたゾンビの身体がびくりと痙攣する。知性を失った代わりに“食物”に対する嗅覚は以前と比べ物にならない。濁った目で周囲を見渡すが獲物の姿はない。

「たたたたたたつっ！」

毛先の高い高級な赤い絨毯の上をゾンビの足元を凄まじい勢いで赤子がハイハイで駆けていく。

「ごぼおおおお！」

ゾンビが反射的に強力な胃酸を吐き散らす。赤子を掠めもしない。

「たやうー！」

ぱつとドアに飛びつく。とドアノブを回して慣性に従ってドアを開き目的地まで一直線。なんてことはない階段の上り下りやドアの開閉も70cmの体高の赤子にはさながらS A S U K Eの障害物。

おおおおおおおつっ！

「ちっ！おりゃー！」

ドスリ！

時たまいる不意打ちが十八番の這いずりゾンビも護身用にとってきたダガーナイフを眉間にぶっ刺して余裕で撃退。

「ぶううう！バブちゃん、ゾンビなんてへっちゃら！」

高速で足元を這いまわる獲物に対してはゲロを吐く以外の攻撃手段を持っていないので、最初から相手にしなけれ

ばいい。

しかし、洋館に跋扈するクリーチャーはゾンビやゾンビ犬だけではない。

ガサガサガサ！

「えっ！な、何い？この音、ゾンビとかじゃない？」

ようやくたどり着いた血清のある保管室前。天井から何やら不穏な音。バブが恐る恐る視線を上げると……。

しやあああつ！

「ぴやあああ！蜘蛛！蜘蛛っ！」

世界最大の蜘蛛のサイズは30cmというが、天井から八つの目でみるくを見下ろす蜘蛛は優に一メートルを超えてい

て、牙を剥き出しにしてみるくを威嚇する。

ぶしゅっ！

「きやああああ！」

大グモはTウィルスの影響で体躯が極度に巨大化したため、巣を張らずに毒液を駆使して狩りを行う。咄嗟に横に転がって

回避したもののゾンビの胃液とは酸性も毒性も比較にならない。絨毯がじゅうじゅうと溶けて泡を吹いている。

がさがさがさ！

「うわあああああつ！もう一匹きちやあああ！」

今度は壁を伝わってもう一匹の大グモが出現。思いのほか射程のある毒液を二体同時に吐いてみるくを追い詰める。寧々丸

の焼いたゾンビの匂いに釣られて別の部屋にいたクリーチャーたちが寄ってきていた。

じゅっ！じゅうううっ！

「ふみやあああつ！」

全身をローラーと化してころころ四方八方に転がって大グモの毒液を辛くも回避する。毒液では拉致が空かないと大

グモが牙を？き出しにしてみろくに襲い掛かる。

「ここによ！赤子を舐めるにや！」

ドスリ！

至近距離で毒液を浴びせようと開かれた口腔にダガーナイフを容赦なく突き差し、せき止められた毒液が暴発して自

らの顔面を焼く。

しやあああああ！

「おまえにはこっち！」

虎の子の違法改造して電圧をでたらめに上げたスタンガンを取り出して、死角になるクモの背中に馬乗りになると脳天

に突きたてる。

バチバチバチバチバチッ！

クモの八本の肢がバタバタと動き沸騰した体液が体節から噴き出す。数十秒スタンガンを押し付けているとボン！と頭

部が内部から破裂して大グモは息絶えた。

「たやう！」

後ろから襲いかかるもう一匹の毒の牙をでんぐり返しで躲して、バッテリーの切れた

に四散する。

「びやああああ……寧々丸ちゃん？」

寧々丸の存在をみとめるとびたりと泣き真似はやんだ。

「どつたのオギャちゃん？ノラちゃんは？」

「寧々丸ちゃん！ノラちゃんがこんなでつかい蛇に噛まれて倒れた！毒蛇毒蛇！だから血清取りにきた」

「マジか。よつしや、あとは寧々丸に任せな」

寧々丸はしゃがんでみるくを背負うと保管室の血清を手を屋根裏部屋前の廊下に急ぐ。胸いっぱい寧々丸の花のような

芳香を吸い上げる。

「寧々丸ちゃん、いい匂い……♥」

寧々丸の少し低めの体温が高速ハイハイで火照った身体に心地いい。ほっとしたことでどうとうとし始めた赤子の耳に寧々丸の独り言が切れ切れに聞こえる。

「……第二期生いまだ健在……引き続き……経過を……観察」

「ふえ、寧々丸……ちゃん……？」

寧々丸の不穏な口調に言いようのない不安を覚えるが、そこは赤子、一度お眠になる

とあととはすんと眠りの世界へ落ちて行つた。
つづく

第十話 DWUの月光

10月31日 午前1時半頃 深層洋館 1階 保管室

ヨーンの毒が回り虫の息となつたノラとクツコ口は血清を投与されたのち寧々丸に回収され保管庫に運び込まれた。体力の消耗が激しいクツコ口は

貧乏神の中で絶対安静。ベッドの上で青ざめていたノラの顔は次第に血色の良さを取り戻し、うなされて乱れていた呼吸も規則正しいモノになる。

「ん、おけ。効いたみたいだね」

「ありがとうございます。寧々丸お嬢様。落ち着きました」

汗の浮いたノラの額に濡れたタオルを置くとほつれた髪を整える。みるくがノラに粉から作つたポカリスエットを入れた吸い飲みを啜えさせるとちうちうと吸つて失われた水分を補給する。

「みるくお嬢様もありがとうございます。ボクなんかのために危険を冒して……」

「よちよち。気にしない気にしない。ノラちゃんが助かつてバブちゃんよかつたあ」

ちつちやい手で頭をよしよしされるとへにやつとノラの口角が緩みフヒヒとキモオタの様な粘ついた声を漏らしながらみるくに芋虫の様に蠢きながらすり寄っていく。

「もつとよちよちしてくださいよお♥みるくお嬢様あん♥」

調子に乗ったノラにみるくは顔をしかめてノラから距離を置く。

「ぶえっ！ノラくん気持ち悪い！」

病み上がりにも関わずノラの顔面を容赦なく足蹴にするみるくにいつものおぎやノラが戻ってきたと煙草を一本灰にすると寧々丸が星と風、太陽が描かれたクレストを渡す。

「館探索してたらこんだけ集まった。上げる」

「そのクレスト！なんか寄宿舎に通じる扉を開けるのに必要っぽいです！」

難解な仕掛け故、断念していたエリアに進めるかもしれないと、赤子で精力を補給したノラはむくりと起き上がり、目を輝かせる。

「でも移動の度にこれいちいち集めるとか面倒くさすぎん？」

渋い顔を浮かべるみるくに二人は今までの不満を爆発させて同調する。

「それな！何考えてんだろこの洋館設計した奴。欠陥住宅じゃん」

「なんか天井落ちてくるし、ほんと訳わけわかんないですよー」

「毒ガス出る部屋とか額縁のスイッチ順番に幼いとカラスが襲いかかって来る部屋あつたりさー」

「変な仕掛けもそうだけど、あのゾンビとかでつかい蛇ちゃん。どっからきたん？」

みるくの一言で寧々丸の顔色が強張る。しかし、それは一瞬のことで、すぐに元のアンニュイな雰囲気に戻り、二人に不自然さを感じさせないように話題を逸らす。

「実はどうしても解けない仕掛けがあつてさー。その貧乏神の中にチョロ姉さんが入ってるんだよね」

最早見慣れたもので存在を半ば忘れかけていた貧乏神はあんぐりと大きく口を開けると、口腔から満身創痍のDWUが顔を出す。

「いたた、なんですの……」

貧乏神の体内に入っているVtubeは少しずつではあるが自然治癒される。瀕死の状態こそ脱してはいるが、まだ本調子とはとてもいえない。

「ピアノで月光？つて曲弾けなきゃ、攻略できんのよ。チョロ姉さんにちよちよいつと弾いてもらいたいんよ」

「この体調じゃ難い……でも可愛い妹たちのためですもの。長女が一肌脱ぎますわね」

「さす姉せんきゅー！じゃ、ほいじゃピアノ部屋に行こつか。調べた感じ飲み物とか軽食もあるし一息つこ」

「本当ですかあ！解毒したらめつちやお腹減つてきました」

「バブちゃんもごはんたびる」

深層姉妹一同はすっかりランチタイムな気分です。ピアノ部屋に場所を移した。

「これめっちゃ高いグラランド・ピアノじゃん！ほしー！」

貧乏神から吐き出されたDWUは立派なグラランドピアノを見た途端、感激からRPを忘れて、つい素の口調ではしゃいでしまう。

「DWUお嬢様。ハーブ・カクテルお待たせです」

「ありがとうございます。はあ、いい香りー」

ピアノ部屋は小さいながらも簡易なバーカウンターもあり、執事見習いのノラはバーテンダーを務め各種カクテルを作っては深層姉妹たちの喉を潤していく。

「うまーおかわり」

カウンター席ではコチュジャンを梅ソーダで流し込みながら煙草を吹かす寧々丸にノンアルのカルーアミルクを哺乳瓶でちうちうと飲むみるく。

「ちゆうちゆうー！いっぱい運動したから喉渴いた」

つまみの裂けるチーズをちうちやい手で割いては口に運んでいく。

「このカクテルめっちゃ良い！なんか元氣出てきた」

「ちよろ姉さん気合入ってんね。これ楽譜」

回復効果の高いグリーン+レッドのハーブを掛け合わせたジンベースのカクテルを飲み干したDWUは寧々丸から楽譜を受け取るとグラランドピアノの鍵盤に指を伸ばす。

てれれん♪てれれん♪てれれん♪てれれん♪てれれん♪

どこか哀愁を感じさせる繊細な旋律に寧々丸、みるく、ノラは聞き入り、クリーチャーとの戦闘の連続で疲弊した精神が癒されていく。

「きやきやつ！お姉さま上手上手ー！」

「はふはふ！凜々しい横顔ですね。普段からあんならみんなから尊敬されるのにい」

姉妹たちにカクテルや軽食を振る舞う片手間で作ったカプレーゼを頬張りながら執事にあるまじき不敬な物言いに隣の寧々丸が溜息。

「だからノラつち一言多いってー」

ゴゴゴゴゴゴゴツツ！

DWUが月光の一節を引き終えるとグランドピアノ左手側の壁がせり上がり隠し部屋が露わとなる。

「うわっ！ピアノ弾いたら隠し部屋が出るってなんなの！わけわかんない！」

「せんきゅ！これが欲しかったんよ！」

隠し部屋の奥にあったゴールドエムブレム。寧々丸は食堂にあったウッドエムブレムと交換してはめ込んで持ち出しに成功した。

（？ピアノが弾けないなら初見であるの仕掛けのことも分からないはず？何故……）

まるで事前に洋館の内部構造を知っているかのような寧々丸の様子に言いようもない疑念がノラの胸に広がる。しかし、ここで仲間割れになるような事態は避けたく、そ

の場での言及は控えた。
つづく

第十一話 るるるピキニきた

10月31日 午前2時半頃 寄宿舎 廊下

クレストを全て集めたので、セバスチャン用に作られたという寄宿舎の攻略に取り掛かる。本館に負けず劣らずのけったいな仕掛けやワスプや大グモ、床の穴から首に巻き付いてくるツルなどがおぎやノラコンビを苦しめる。

うおおおおお………！

廊下の角からふらふらとした足取りで現れたセバスチャンの成れの果てに気づかれ、る前に中身が腐った頭部にアサルトショットガンで照準を合わせると、心の中で手を合わせて引き金を引く。

「よしっ………(ハッ)っ！」

バオン！

轟音と衝撃と同時に脳漿を飛び散らせゾンビの頭蓋が弾け飛ぶ。

「いやあ。気持ちいいですね！一発で仕留めるの。反動も考えて少し照準をずらすのがコツですね」

ストック越しとはいえ大口径ショットガンの衝撃はノラの華奢な身体には中々に堪

える。

「ぶえ！グロツ！目玉が転がってきたあ！」

「ああなつちやったら。もう助かりませんから、引導渡してやるのが人情つてもんでしょ」

アサルトショットガンの前床をスライドさせて排莖すると、ノラの耳（人耳）がぴくりと動き、言い争っているような声が聞えた。

「—で、とめるとなまほしちゃんは」

「寧々丸お嬢様？一体全体なにが……」

「ノラちゃん！こつそり立ち聞きしよ！様子がおかしいよ！」

アンニユイな普段の寧々丸とは思えない怒鳴り声。一室から響く声にドア越しに耳を傾ける。

「話が違う！それじゃいままでの—」

「もういい！また連絡するから—」

寧々丸の声しか聞こえないが誰かと会話しているらしい。一方的に会話？を打ち切ると肩を怒らせて早足でドアに歩いてくる寧々丸の気配に慌ててドアに当てた耳を離すと乱暴に開けたドアが肩に当たりかける。

「！あつ、ノラちゃん。オギャちゃん。ごめんっ！びつくりさせて」

興奮して紅潮した雪の様に白い頬。細い眉根が寄って眉間に出来た深い皺。不機嫌そうに結んだ唇。憤怒に歪んでなお美しい顔の寧々丸がはつと我に返る。

「だ、大丈夫です。寧々丸お嬢様……それより、今の話し声は……」

「だれとはなしとつたん？」

二人の疑惑の視線に目が泳ぐ前に寧々丸は口を開く。

「あーその、独り言、寧々丸もやきが回ったねー。この状況に神経が参ってるんよ」

「そ、そうでしたか……」

「辛かったら。バブちゃんがヨチヨチしたげる」

ノラとみるくの純粹な善意が今の寧々丸にはありがたくも胸に刺さる。口に広がる苦い味を飲み込みいつもの雰囲気を取り戻す。

「あんがとーノラちゃんたちと話して少し楽になったわ。お礼にこれ上げる」

寧々丸からの001号室の鍵と寄宿舎の地図を受け取る。

「ありがとうございます。地図は助かります！」

「この鍵さつき開けられなかったとこだあ！」

「寧々丸も探索頑張るから協力し合おう」

寧々丸の独り言という説明に納得したかと言えばウソになるが、身内で疑心暗鬼になっただけはそれこそ全滅しかねない。

地図で寄宿舎の構造を頭に叩き込み、さっそく001号室の鍵を外したノラはドアノブを回し、少しだけ開けたドアの隙間から慎重に室内の様子を窺う。

「よしゾンビはいないですね……!」

「だう! 噛みつかれそうになったらバブちゃんがダガーぶつ刺す!」

赤子の手には大剣のような大ぶりなダガーナイフを逆手持ちにして構えてノラを鼓舞する。

「みるくお嬢様! 頼もしいです!」

背中への頼りになる小さい相棒に鼻の下が伸び、警戒心が緩んだタイミングでノラの視界にだらりとぶら下がった両足が映りぎよつとする。

「ひやあああああああああつ!」

一瞬で青ざめたノラがゆっくりと視線を上げると首吊りをしたセバスの一人がてるてる坊主のよう

に天井からぶら下がっている。

「し、死んでる? ゾンビになる前に自害したんですかね?」

「ノラちゃん! バブちゃん! あのピストルほちい!」

みるくの小さな指を差す机の上には片手に納まるサイズの小型拳銃デリンジャーがおかれている。

「見た感じ一発使われてる。これならみるくお嬢様の護身用になるかも」

みるくの小さい手でもぎり扱える大きさ。銃本体は小さくとも大口徑で寧々丸愛用の44マグナムにも匹敵する破壊力を秘めている。

「ぷいっ！ばきゅん！ばきゅん！！」

実弾入りの銃にも関わらず嬌声を上げておもちゃ扱いしてはしゃぐみるくに顔を青くする。

「ひえっ……！ゾンビだけじゃなく、ボクの頭を撃ちぬかないでくださいねえ」

「ぶえ？ノラちゃん、あの浴槽の中にピカピカしたのあるう！」

「デリンジャーに興奮して部屋中に照準を合わせているうちに濁った浴槽の中に金属に光を認めた。」

「確かに、うへっ！なんか匂ってますよ……」

浴槽の水は腐りかけていて不潔極まりないが、この洋館は意外なところに重要アイテムが落ちていたので無視するわけにはいかない。鼻をつまんだノラが浴槽の栓を抜くとなにやら制御キーらしきものがそこに沈んでいた。

一方、寄宿舎地下の大水槽ではるるが脱出のプランをいよいよ実行に移そうとしていた。

「なめこたろうも電池切れ、わずかな食料も尽きた。もう万事休すだあ。休すだあー！！」

深層組のとある大型企画に使用されるといふ大水槽の管理のために他の深層姉妹に先行して洋館に来ていたがゆえにゾンビの大量発生に巻き込まれずに済んだが、制御室内で孤立無援の状態になってしまい、身動きがとれなくなっていた。

「ごぼっ……！」

「ひっ！」

大水槽の覗き窓をぬっと黒い影が横切る。感情を宿さない冷たい瞳が窓越しにるるを見た気がして背筋が凍る。

B・O・W”ネプチューン”。Tウィルスの影響で巨大化してさながら古代鮫メガロドンのようなサイズと化して大水槽の主としてるるを威嚇する。

るるを逃さないと言わんばかりに水槽の壁面に体当たりをする回数も多くなってきた。乱杭菌の餌食になるのは時間の問題。

「ここにはもう留まれない。ノラちゃんたちと、なんとか合流しよう！」

白衣を脱ぎ、腰の下まで伸びた灰銀色のロングヘアを結わえまとめ上げる。

大水槽からの脱出は通路まで浸水してため泳ぎを余儀なくされる。際どいビキニを纏ったるるの姿は蜂のようにくびれた腰。腹部は目を凝らせばうつすらと腹筋が割れている。小ぶりながら引き締まった上向きのヒップ。サイズ自体は控えめながらしっかりと膨らみと整った形の分るバスト。洋館の中庭で行われる予定の深層BBQ

の前に完璧に仕上がった肉体はまぶしいの一言。

「いっちに！さんしっ！」

入念な準備体操で身体を解してソナーで鯨の回遊ルートを確認。隙を見つければぎりぎりまで侵入できない浅瀬まで到達できる。

「よし、いける！このガワになって会得した能力ならっ！」

距離にして数十メートル。愛用のゴーグルを水中眼鏡がわりにつけたるるるは渾身の勇気を振り絞って水没した通路に飛び込んだ。

救出済深層姉妹 現在5人

第十二話 深層シャーク危機一髪!

10月31日 午前3時頃 寄宿舎 002号室

バスタブからカギを発見したノラは寧々丸が触手が飛び出てきて首を絞める床穴を石造で塞いで安全

に通行できるようになった002号室を訪れた。

「寧々丸お嬢様もある程度探索しただろうけど、一人じゃ気付けない仕掛けもありますよね」

奥にある棚の仕掛けを発見。みるくの発案で動かしてみると、梯子が出現した。

「おお!みるくお嬢様!地下に通じてますよ!」

「だう!この先にあるるるちゃんがいるんだよね」

途切れ途切れのるるるとの短い通信で寄宿舎の大水槽で孤立していると、聞いているのでようやく救出に向かうことになる。

「そうですね!必ず救出しましょう!」

決意も新たに階段を下りると、またしても通路の一部が浸水していたため、水中に木

製の箱を落として道を作るといふ余計な手間で氣勢を削がれながらも大水槽に到着した。

「うわっ！めっちゃ浸水してる！首の近くまで浸かる！」

円形の水槽は壁側の通路まで完全に浸水して、身長150cm足らずのノラには足がつくかもおぼつかしい。

「だうーだうっ！」

「ああ、みるくお嬢様これじゃ溺れちゃいますね！」

ノラの背中のみるくは顔の半分近くまで水に浸かり、半ば溺れかけている。おんぶ紐を緩めるとノラの頭に昇り、両足を肩に乗せて肩車の体勢となり、犬耳（癖毛）を掴む。

「すいません。みるくお嬢様。しばらくそのスタイルでお願いします」

身体が今、クリーチャーに襲われたらひとたまりもない。

「ノラちゃん！あれ！あれっ！」

みるくが小さい指で指さした方角を見ると、犬かきで泳いでくるビキニ姿のるるの姿が見えた。

「るるのお嬢様！待っていてください！今、ノラが向かいます！」

頭に赤子に乗せたノラの姿を見つけてゴーグルの中に涙が溜まる。嬉しさを尻尾をちぎれんばかりに振って水の飛沫が上がる。

「るるるお嬢様!」

「ちやんと捕まったね! いくよ! うりやりやりやりやっ!!」

るるるが犬かきを開始した直後にネプチューンが数舜前にノラがいた通路に突っ込む。図体が大きい分小回りが利かず、方向転換に時間がかかる。

「ひやあああああ! あ、足持ってかれるとこだった!」

「大丈夫! しつかり捕まって!」

絶体絶命の窮地を潜り抜けたと思つたらまた一難。ネプチューンから生まれた子ザメが二匹も姿を現し、逃走中のノラたちを追跡する。

「うわあああああ! また出た! それも二匹い!」

ノラも悲鳴を上げながら必死で足を動かすがどんどん距離を詰められていく。

「親玉より泳ぐのが早い! このままじゃ追いつかれるよお!」

子ザメは鈍重なネプチューンよりも泳ぐスピードも速く小回りも利く。るるるだけならともかく、荷物を抱えた状態で追いつかれるのも時間の問題だ。

「ひいひい! 追いつかれるううう!」

「たやう! ノラちゃん、いい加減うるちやい!」

ノラのお家芸の絶叫にもうんざりしたみるくが閃光手榴弾のピンを抜いて水中に放り入れる。

ギイイイイイイン!

数秒後、閃光手榴弾が水中で炸裂。轟音と閃光で五感が麻痺した鮫はあらぬ方向に泳いでいく。犬かきで頭を水中に出ているるとノラたちはノーダメージ。

「よしよし!てっ!いやああああ!でつかいのがこつちに来たああああつ!」

子ザメを退けたと思つたら今度はネプチューンがまつすぐにノラ達めがけて進んできた。

「ノラちゃん!あと、もう少しだから!がんばつて!」

ラストスパートをかけてようやく制御室前の階段にたどり着き、るるるがノラを引き上げて、水槽からようやく脱出する。

ドガア!

「いやあああああああつ!食われるっ!!」

獲物を逃した当てつけの様に階段に体当たりをしてネプチューンは大水槽の中に戻つていった。

「ひっひっ!るるるお嬢様あ!助かりましたあああああああ!」

「ぶううううっ!るるるちゃん!ありがちよ!」

極度の緊張が解けて腰が抜けたノラがるるるの足にしがみついて号泣する。みるくは控えめながら弾力と張りに満ちた乳房に飛び込んで赤子の特権でビキニを捲りあげ

て乳を求める。

「んまつ！んまつ！ちゆうううっ!!」

「あはははっ！バブちゃん撥つたいよおっ！」

るると戯れるみるくを見てノラの雰囲気が変わった。赤子の特権を振りかざすみるくを強引に引き剥がして、最早存在していることを忘れていた貧乏神の口の中にぽいと放り込む。

「はい。みるくお嬢様はお身体を温めましょうねー」

「びやあああああ！やだあああああ！るるるちゃん！おっぱいおっぱいいいいいい！」

泣き叫ぶ赤子の声は貧乏神の口腔が閉ざされた途端に遮られる。邪魔が無くなり、思いつめたような目をしたノラは貧乏神の口に手を突っ込んでバスタオルを手に取ると、るると向き合う。

「えっ！ノ、ノラたん……?」

「……るるるのお嬢様。お身体を拭きましょう。風邪をひいてしまいます」

有無を言わせない強引さで自分よりも一回り小柄なるるるの身体を丁寧にゆつくりと拭き始める。

健康的な血色の良い白い肌。身体は痩せても筋肉がついたおかげで上向きで生意気

に存在を主張している。贅肉一つない腰回りだが臀部には鍛え上げられた筋肉の上にしつとりと脂肪が乗っている。

「く、くすぐりたいよ……」

「おほお♥控えめながら出るとこはしつかり出てる♥触り心地がたまりませえん♥」

にまにまと口角を上げながら、鼻の下をだらしなく伸ばす姿はキモオタそのもの。中性的な外見では誤魔化しきれないほどの気色悪さに堪らなくなつたるるるが、全身を拭き終つてなお満足いかず素手で撫で回そうとするノラからそつと距離を置く。

「ノラたん、銃の整備でもしようか？連戦でガタがきてるかも」

「はっ！そうですな！すいません。調子に乗ってしまつて……」

るるるのジューシーな肢体を前につい距離感がバグつてしまひまたやつちまつた自分を恥じるノラ。いたたまれずるるるが振つた話題に全力で食い付く。

「いいよいよ。ノラたんも精神的につらかつたんだよね」

内心ではノラにドン引きしていたが、この状況で仲たがいは絶対に避けたいので笑顔に勤めて内心の嫌悪感はおくびにも出さない。

「そ、そうなんです！ボクももう精神的にもう参つてしまつて……あつ！これつて直せませす！」

二人で無理矢理話題を変えて誤魔化すが、一度広がった気まずい雰囲気は中々払拭で

き
な
か
っ
た
。

救
出
済
深
層
姉
妹

現
在
8
／
6

第十三話 おぎやノラてえ

10月31日 午前3時半頃 大水槽 制御室

制御室のカギを使い、階段を下りて円筒状の制御室に下りると水槽の覗き窓から子ザメが見える。しかし、堅牢な強化ガラス越しではなにもできないと三人は胸を撫で下ろす。

「ふわあ、なんか水族館みはいれふね。ここならあのサメも手がだふえないれしよう」

ひとまずサメの危険はないと安心して何と無しに視界に入ってきたホワイトボードに掛かれた数字とにらめっこして苦痛を紛らわす。

「ノラたんが制御室の鍵を持ってきてくれて、助かったよー」

苦笑いを浮かべながらるるは腕の中で腕組みをしてプリプリと怒るみるくの頭を撫でて落ち着かせる。

「たやう！ノラちゃん、きあい！」

るるの身体を鼻を伸ばしながらの拭き拭きタイムが終わるや否や、貧乏神の口の中から強引に飛び出して、自分を無理矢理るるの乳房から引き離れた憎きノラの顔面に飛び掛かった。

「だう!だう!」

ぺちぺちぺち!

「いたた!すいません!みるくお嬢様っ!」

ぺちぺちと赤子の拳は痛いというよりはくすぐったく、ノラはみるくとじゃれ合うつもりが即座に認識を改めることになる。

ぽかぽかぽかぽか!

「だうだうだうだうだう!!!」

ぽかぽかぽかぽか!

「いだっ!いだだ!ちよ、ちよ!しゃ、しゃれにならな……!」

父の恨みより恐ろしい者はない。赤子のラツシユは次第に重さと速さを増していく、みしみしと頬骨が軋み、度重なる衝撃で目の奥で火花が散る、ついにノラの整った鼻から鼻血が噴き出す。

「だうだうだうだうだうだああああう!!!」

ぽこぽこ!ぽこ!ぽきやああ!

「ぶべー!ぶぎや!おんぎやああああ!」

ラツシユの締め強烈無比なアッパーカットをお見舞いして、ノラをノックアウトする。

「オギャちゃん！それ以上やったら、ノラたん死んじゃうよお！」
「ふう！これでチャラにしてあげう」

大の字になって倒れたノラになお追い打ちをかけようとしてみるくをるるが抱え上げ、まだ腹の虫がおさまらないみるくはびしつと中指を立てた。

（これ、この洋館で受けたダメージで一番でかいかも……！）

中性的に整った顔は約二倍にまで膨れ上がって目も鼻も分からなくなっていたが、今まで貯め込んだ救急スプレーとハーブ類を大量に消費してようやく顔が分かるまで回復する。

「ノラたん、ほ、本当に大丈夫？」

「はい。頑丈なのが取り柄なので……もう治りました」

顔が腫れ上がってろくに回らなくなっていたが、ようやく呂律が元に戻ってきた。

「とりあえず排水すればいいんですよね」

「うん、奥の方にあるボタンを押せばすぐだよ」

お安い御用とノラがスイッチを押すと、大人しく泳いでいた子ザメの様子が一変する。

ドオン！

「ぎやあああああああ！な、なにっ！」

子ザメが横腹で強化ガラスに思いつきり体当たりされたことで、仰天したノラが奇声を上げる。

「ノラちゃん、うるちやい！」

ドン！ドオン！

「ひええ！ノラちゃん、ちよつとこれシャレにならないよお！」

親ザメのネプチューンで比較して小ぶりとはいえ2メートルはある巨体で強化ガラスにヒビが入る。警報が鳴り響きうるるがみるくをノラに預けて、制御装置の操作パネルに指を走らせる。

「よしセーフティ解除！あとはレバーを下ろせば！」

間髪入れずにうるるるがレバーを下ろすが、シエルターが半分まで下りた時点でストツプして、最後まで下りない。

「ひやあああ！これじゃ意味ないですよお！」

「ノラちゃん！落ち着いて！うるるお姉ちゃん！どうすればいいの！」

悲鳴を上げてオロオロする情けの無いノラとは違い冷静な赤子の言葉にうるるも冷静さを取り戻す。

「油圧バルブを回して！そのホワイトボードの数字通りにして！」

「ぶつらじやー！」

律義に敬礼したノラは油圧バルブを回すと、持ち前の記憶力でホワイトボードの数字を暗記していたノラはスイッチを押すとシエルターが上がり窓が再び開いた。

「えっ！また開いた！」

「よし！制御装置のセーフティを解除！シエルターのレバーを下ろして！その後は排水スイッチをもう一度押すんだよ！」

「は、はい！」

ノラがレバーを下ろすと今度こそシエルターがすべて下り、間髪入れずに排水スイッチを押すと排水が再開する。

「こ、これで助かった……ですか？」

「そうだね。これでサメたちは無力化できた……あーやばい！腰が抜けたあ」

耐圧シエルターが下りて一安心となつてへなへなとるるるがへたり込む。ノラも緊張が解けてよろけると耐圧シエルターに背中を預ける。

「そういえば。銃器の点検してあげる約束だったね」

「ああ！お願いします！実は拾ったグレネードランチャーが壊れてて……」

またしても存在を忘れかけていた貧乏神の口から動作不良を起こしている連発式グレネードランチャーを取り出してゐるるるに手渡す。

「それくらいならお安い御用だよ！」

グレネードランチャーの重さによるつきながら工具箱片手に修理に取り掛かる。ガワと魂の一体化が進んだことでガワの設定通りの小器用さを見せてあつという間に修理が完了してしまう。

「はえー！さすが博士、見事なお点前です」

「へへ。これくらいしかできることがないから」

今までの道中で手に入れた火炎弾や硫酸弾、グレネード弾という各種弾頭をようやく活用することができる。

「いやー。ショットガンとハンドガンだけじゃ心もとなかつたんですよー」

「ぶう！そのグレネードランチャー。バブちゃんの戦車の主砲くらい強そうー」

さつきまでの機嫌の悪さはどこえやら、新しいおもちゃですっかり機嫌を直してしまふ。

「適当な相手に試し撃ちしたいなー！グレネード弾ならゾンビくらいなら木っ端微塵ですよー」

「バブちゃん、他のも試したい！火炎弾は炭化するほどの火力かな？硫酸だと骨まで溶けるう？」

ノラがおんぶ紐で再びみるくを背負いながら物騒なことを言う様子になるが破顔する。

「あははははっ！二人ともおつかねー。ついでに改造して連射機能も付けたから試してみてね！」

「うおおお！素晴らしいです！るるるお嬢様！」

「ふううう！空爆！爆撃！」

グレネードランチャー改の話題で盛り上がる三人が、制御室から出ると排水された水槽にネプチューンの巨体が横たわっていた。

「ひええ……間近で見るとおつきいよ！うわわ！こつち見た！」

「きやつきやつ！陸の魚って間抜けえ！」

怯えるるるとはしゃぐみるくのリアクションの落差に苦笑いを浮かべたノラはネプチューンに向けてグレネードランチャーを構える。

「泳げないとはいえのたうつだけでエライことですな。安全のために確実に息の根を止める必要があります」

「だう！サメの丸焼きー！」

「おお！みるくお嬢様からオーダーいただきましたー！」

ノラが鼻歌交じりにグレネードランチャー改に火炎弾を装填すると白いどてつばらに照準を合わせて引き金を引く。

ボシユシユシユシユシユツ!!

六発の火炎弾が次々と着弾してネプチューンの巨体が炎上する。瞬間的とはいえ一千度近い高温で全身を焼かれたネプチューンは断末魔もなくびちびちと跳ねるとやがて息絶えて動かなくなつた。

「ぶえーこげくちやい！」

アンモニア臭が入り混じつた焦げ臭い臭いにみるくが顔をしかめて鼻を小さい手で覆う。

「とりあえずこれで水槽からはおさらばできるね！もうサメには懲り懲りだよー」

サメがにらみを利かせる大水槽の窮屈な環境にうんざりしていたるるは解放感から思いっきり身体を伸ばす。嬉しさからびよこびよこと耳が動き、ノラに比べれば控えめな毛量の尻尾がぶんぶんと左右に揺れる。

（るるるお嬢様♥やっぱり可愛いです♥）

るるるの愛くるしさに心奪われて抱きしめようと、鼻の下を伸ばしながらるるるの後ろからにじり寄る

ノラの癬毛をみるくは両手でぐいと引っ張る。

「ノラちゃん、めっ！」

ぎりりりり……

「いたた！みるくお嬢様！ハグはやめますから！ああ！ぼくのチャームポイントがちぎれる！」

仕えるべき令嬢に不遜に劣情を催すダメ執事のセクハラを未然に防いで鼻高々のみ
ると赤子の怪力に悶

える二人がおかしくてるるは笑みをこぼす。

「あははははっ！やっぱり二人は凸凹コンビでえてえだね」

救出済深層姉妹 現在8／6

第十四話 捕らわれのノラ

10月31日 午前4時半頃 薬品庫

るるるは脚立を上り下りしては各種薬ビンが並んだ棚から必要なビンを取り出し、的確な配合をしていく。

「ひよー！流石博士！手際良い」

寧々丸は煙草を吹かしながらV-JOLTを作成するるるるの背中を眺めている。

「きやう……薬臭い臭い……ちゆき♥」

屋敷を駆け回った疲労とようやくノラを救出する足がかりができたことで、臉が重くなったみるくは薬品庫に充満する独特の消毒薬臭さにうっとりとして船を漕ぎ始めている。

「待っててねノラたん……もうすぐだよ」

事の起こりは一時間前にさかのぼる。

ぐるるるる……！

洋館の中庭で五頭のケルペロスが涎を滴らせながら唸り声を上げ、ノラとみるく、るるるを威嚇する。

「生意気な犬畜生ですなー。このぼくに喧嘩売っちゃいます?」

フル装填のグレネードランチャーの重さがノラの気を大きくさせる。戦闘能力が劣るるるはノラとみるくの後ろで怯えている。

「ノラちゃん! やつちやええええええつ!」

意を決した一頭に四頭が続いて一斉にノラたちに襲い掛かる。

「うわあー! きたああー!」

ハンドガン程度の火力では波状攻撃を防げず、アサルトショットガンでは集弾性が高すぎてケルベロスの群れに対して“面”での攻撃ができない。

しかし、グレードランチャー”改”であれば関係ない。

ボシユシユシユシユツ!

六発のグレネード弾が放物線を描きケルベロスの群れを“空爆”する。具グレネード弾は次々とケルベロス本体や地面に着弾して炸裂。爆風と破片がケルベロスの群れをあとという間に血の霧と化す。

「ほおお! 愉快痛快! 堪りませんねー」

群れると鬱陶しいことこの上ないケロベロスを一網打尽に出来た爽快さといったらなく、思わずむふむふと口角が緩んでしまう。

「きゃつきゃつ! 犬ツコロ! ギー! ギー! ギー!」

「ひえー！グロすぎるよお」

新しいおもちゃに上機嫌なおぎやノラとドン引きのるる。しかし、イキリメスガキの鼻はへし折られるものと相場が決まっている。

調子に乗ったが挙句。まだ探索していなかった寄宿舎の広間に迂闊に足を踏み入れたのが運の尽き。

「な、なんですかこれえええええつ！」

「ええええええ！めつちやうねうねしてる！キモイー！」

「ぶえ！球根のお化け！」

部屋の四方一面をびつしりと埋め尽くす蔦。天井からぶら下がる巨大な球根状の器官。まさしく寄宿舎の“主”にふさわしい威容。

じゅつ！

「あちつーさ、酸?！」

天井から滴る滴る体液には強い酸性を帯びている。相手のホームグラウンドで戦闘時間を長引かせるのは自殺行為とグレネードをこの植物の化物の“核”とみなした球根に向けてグレネードランチャーの砲身を向けて、引き金を引き絞る。

ボシユシユシユシユ！

二階建ての寄宿舎の天井は高く連射機能と引き換えに射程が短くなっている。放た

れたグレネード弾六発の内、二発は球根に届かずその周りから生えた野太い蔦に当たり炸裂する。

残りの四発は球根に命中したものの堅固な外殻を破壊するには至らない。

「対して効いてない?! そうだ! 植物っぼい敵だから火炎弾を使えばっ!」

「るるるお嬢様! そうですね! 貧乏神!」

るるるのアドバイスによしきたと貧乏神（アイテムボックス）の口から火炎弾を取り出そうと手をつ突つ込もうとしたその時。野太い触腕が俊敏な動きでノラを捕らえた。

「ちよっ! いやあああああつ!!」

「うわあああああん! やだあああああああつ!!」

「そんな! ノラたん!」

ノラが高々と持ち上げられ、るるるが息を飲んでいるとノラが咄嗟に抱っこ紐をほどこいてみるくをるるるに投げ渡す。

「るるるお嬢様! みるくお嬢様を頼みます!」

赤子をしつかりと腕に抱きしめるとるるるはノラに向かって深く頷くと、貧乏神もるるるの身体にまとわりつく。

「う、うん! 待っててノラたん! 必ず助けに来るよ!」

「うわああああん! ノラちゃん!」

ノラの無事を祈りつつ断腸の思いで二人は広間を後にした。
救出済深層姉妹 現在 8 / 6

第十五話 寧々丸のいないいないばあ!

10月31日 午前4時頃 洋館一階 廊下

唸り声を上げながら迫るゾンビにベレッタSCの引き金を引くたびにるるの腕が大きく跳ね上がる。

バンバンバン!

「わわわ!当たらないよー!」

深層家執事として戦闘訓練を受けたノラと異なり、全くの素人であるるるは三発に一発程度しか当てられない。

おおおおお……!

「わあああー!来ないでええええつ!!」

バンバン!バンバンバンツ!

ゾンビの接近に泡をくって闇雲に打ちまくってついに弾切れとなる。

「た、弾がっ!いやああああつ!」

うおおおおおつ!

涎を滴らせたゾンビがるるるに掴みかかり、その細首に食らいつこうとする。

「やだああああ!」

「たやう!」

ばこん!

るるるの背中のみるくが大きく開いたゾンビの口に閃光手榴弾を振り込み、手榴弾のピンを引き抜く。ゾンビが一瞬虚

をつかれた隙にるるるが両脚でゾンビを蹴り飛ばす。

「どひええええ!爆発するー!」

ばおん!

床にとっ伏せたるるるの頭上で閃光手榴弾が炸裂してゾンビの頭蓋骨や脳漿が飛散する。

じゆううううう……!」

「えっ!なにになにつ!この匂い!酸っぱ臭い!」

「びきやあああ!顔がじゅって!じゅってなるうううう!」

血や骨片だけでなくゾンビの強酸化した胃液も飛散。よりにもよってみるくの頬に附着。ぷにぷにのほっぺがじゅく

じゅくと焼け爛れ悲鳴を上げるみるくになるるるが泡を食う。

「わわわわわっ！バブちゃん大丈夫?!」

大慌てであらかじめ調合しておいたグリーンハーブ軟膏をみるくの頬に塗り付ける。幸い傷は浅かったものの、みるくは本格的にぐずり始める。

「ひぐつ……ああ……あああああああつ！」

「わわわわわっ！どうしょ！どうしょつ！泣いちやつた泣いちやつた！」

一度泣き出した赤子は手に負えない。

「よ、よしよーし！たかいたかーい」

「びやあああああああああああつ！」

高い高いしてもダメ。

「ほ、ほら飴ちゃんあげるよ！」

「うっー！」

白衣のポツケにしまつて忘れていた飴玉を取り出して与えようとしても顔を背ければほろと涙を殴す。

慌ててみるくをあやそうとるるは必死に手を尽くすが、どれも逆効果でみるくは延々と泣き続ける。

「びえええええええええん!」

「うわー! どうすれば泣き止むの? もうこっちが泣きたいよー!」

泣き叫ぶみるくを抱えて途方に暮れるるるの鼻を漂ってきた紫煙が撫でる。

「ぷはー。どつたのるるるちゃーん?」

「ね、寧々丸ちゃん!」

独特の鼻にかかったしやがれた声音にるるるが後ろを振り返ると煙草を美味そうに吹かす寧々丸の姿があつた。

「ね、寧々丸ちゃん! 無事でよかつたよおおおお」

みるくを抱きかかえたままとダツシユして寧々丸の胸に飛び込んでいく。

「よしよし。怖かつたね」

薄い胸でみるくごとるるるを受け止めて、優しく抱きしめて頭を撫でて慰める。小柄なるるるの腕の中

で泣きじやくる豆粒のように小さいみるくの顔を覗き込んでによと口角が上が

る。
「あああああ♥バブちつたら泣いても可愛いーねえ♥でも笑つてる顔がいつちばーん♥」

すっかり上機嫌のみるくを受け渡してあやしてもらう様を見て、絶対絶命の見習い執事のことを思い出す。

「そうだそうだ! ノラたんが危ない! 蔦のおばけに捕まってるの!」
るるるはプラント42の蔦に捕らえられたノラのことを説明する。

「ノラちゃん! ノラちゃん!」

「マジ!? そりゃ一刻の猶予もないね。でも、その蔦のおばけとは真正面から戦いたくなー」

「えっ?! じゃあ、どうすれば……」

「へっへー。そこで生返博士の出番って訳」

洋館をくまなく探索していた寧々丸は蔦の化物ことプラント42の性質を書き記した書類を手に入れていた。

「V—J O L T……? これさえあれば……!」

「たやう! ノラちゃんたすけう!」

「うっし! ノラっち救出作戦開始!」

ノラ救出という目的の元に三人のこころは一つになる。一方その頃ノラはとうとう
みしみしみし……

野太い蔦に締め上げられ天高く掲げられたノラの細身の胴体を万力の様に締め上げ肺が圧迫されてうめき声が

漏れ出る。しかし、青ざめた顔に関わらず口角は歪に上がり屈折した笑みを形作っている。

「おうう……これはこれで……良いかも……です♥」

新しい世界に目覚めていた。

つづく

第十六話 VSプラント42

10月31日 午前4時半頃 寄宿舎 大広間

製薬室でるるるが精製したV-JOLTを警備室の天井をぶちプラント42の根にかけて枯れさせると、武器弾薬、回復用のハーブを揃え、みるくの抱っこ紐も新調した一行はいよいよプラント42との戦いに挑むこととなった。

ヴヴヴヴ……！

外敵の侵入を察知した大広間にある巨大な巣からワスプがわらわらと飛び出してくる。

「わっ！蜂ウザっ！何匹いんだよー！」

マグナムを構える寧々丸だが、どれほど高威力だろうと“点”による攻撃はワスプには効果が薄い。

「まかせて！寧々丸ちゃん！汚物は消毒だー！」

ぐいつと自信満々に眉を上げて前に出たるるるが破損したノラのショットガンとベースに各種適当なパーツを組み合わせ、製薬室にある薬品と灯油を組み合わせて作った燃料で作り上げた即席の火炎放射器を雲霞の如く殺到するワスプに向け引き金を引

く。

ボオオオオオオオオツ!!

目の前に巨大な火球が出現したかのような広範囲かつ圧倒的な火炎の奔流を前に数匹のワスは一瞬で炭化してボトボトと床に落ちていく。

「るるるちゃん、マジすげー!これなら蔦のお化けつてのもイチコロじゃん!」

まさしく飛んで火にいる夏の虫といった痛快さに寧々丸とみるくのテンションが爆上げする。

「たやう!火炎放射器つよつよお!このままボス戦!ボス戦!」

「よしみんな!ノラたんを助けるよ!」

火炎放射器の圧倒的な火力の前に3人の士気は最高潮。意気揚々と大広間の観音扉を開けると寄宿舎の主が姿を現す。

「うえー!何あれ!球根?でつか!シャンデリアみたあい!」

二階構造の見上げるほど高い天井にぶら下がった球根とも巨大な蕾とも形容できるプラント42の本体を起点に無数の蔦が天井から血管の様に走る様はまるで巨大な生物の体内に侵入したような異様さに初見の寧々丸は思わず面食らう。

「ノラちゃん!助けに来たよおー!」

「うう……み、みるく……お、お嬢……さま」

鳶に締め上げられ血の気の失せた顔に恍惚とした表情を浮かべたノラのむき出しの背中がびくり痙攣して辛

うじて息の根が残っていることを伝える。

「え、えいっ！先手必勝！」

慌てて火炎放射器を構えたるるは火炎放射器を本体に向けて構えて引き金絞る。しかし、球根の周りの硬質な殻が閉じて怒涛の火炎を完全にシャットアウトする。

「ええー！嘘っ！効かない!?!」

「殻もそうだけど天井が高すぎて微妙に射程から外れてるよお！これじゃ燃やせない」

火力こそ高いが射程は短く、たとえ殻が無かったとしてもるるの位置から天井にぶら下がった球根状の本体を炙ることしかできない。

「二階に行くこつ！あそこなら直火焼きにできるよっ！」

「ここぞという場で冷静な赤子の小さい指が階段をびしっと指さす。

「よっしや！援護するよるるちゃん！」

「うん！寧々丸ちゃんお願い！」

結構な重量の火炎放射器を抱えて階段を駆け上がっていくるるを絡めとろうと野太い鳶が伸びるが

寧々丸の正確な射撃で撃ち落とされていく。

ズドン！ズドン！ズドン！

「はあはあ！めっちゃしんどい！でも、ここなら……ひやつ！」
じゅおおつ！

天井から滴る強酸を帯びた体液が滴りるるの足元に落ちる。これでは火炎放射器を構えることもままならない。

ならない。

「くっ！なめこたろう！シールド展開！」

「了解です。博士」

るるの後ろを影の様についてきていたやたらイケボななめこたろうが単三電池四個分の電力を消費して

3分間だけシールドを展開する。なめこたろうの頭上から青白く輝く八角形の力場が瞬時に展開して半円

状の防壁を形成してるとみるくの身をを守り通す。

「だう！なめこたろう！ないす〜」

閃光手榴弾のピンを抜いて赤子場慣れした強肩で投擲。硬質な殻を吹き飛ばす。衝撃に殻を閉じて本体を奥に収納しようとするが間髪入れずに寧々丸が協力無比な44

マグナム弾を叩き込み堅牢な殻を次々と破碎していく。

「ばおん！ばおん！ばおん！」

「うりやうりやー！バブちー！加勢するよー」

みるくの手榴弾の炸裂と寧々丸のマグナムの援護射撃で殻がすべて剥がれ落ち、脆弱な本体がむき出しとなったタイミングでるるは火炎放射器の狙いを定める。

「これで終わり！やああああああつ！！」

「ぼおおおおおおおおおおつ！」

タンクの燃料を全開放してコアにありつただけの火炎を叩きつける。プラント42の本体はあつという間に炎に包まれ蔦が断末魔の痙攣を始める。

「よし効いてる！うわあああああああああつ！」

「わきやああああああ！」

「博士っ！」

最後の抵抗でプラント42がデタラメに振るった蔦がシールドが切れて無防備になったるるに直撃する。二階部分が崩壊して、みるくの悲鳴と共に真つ逆さまに転落するるるをなめこたろうがプロペラを全開にして辛うじて持ち上げる。

「電力ももう限界……寧々丸殿……博士を頼みます……」

気を失ったるるはみるくを背負っていたのでうつ伏せで床に横たえると電池切れ

でなめこたろうがノイズ交じりの声と共に床に不時着する。

「うわあん！やだやだやだっ！るるるるちゃーん！」

「バブち落ち着いて!!貧乏神いー！るるるるちゃんとなめこが限界だから呑み込んだってー！」

全身打撲で満身創痍のるると電池切れのなめこたろうを貧乏神があんぐりと口を開けて呑み込む。貧乏神の体内であれば少しづつでも傷が治癒される。

— ターブルのように粘性の高い燃料で長々と延焼して炭化したプラント42はボトンと床に落ちて浜に打ち上げられたマリモのような姿となる。

「うぐっ！るるるるお嬢様……すいません。みなさん、ボク、役立たず……で」

力を失った蔦から辛うじて抜け出たノラは極度に消耗してこそいたが、なんとか自力で立ち上がる。

「ノラちゃん気にしないで、取り合えず場所代えてゆっくり休もつか」

みるくを背負い、半ば失神しかけているノラをお姫様抱っこすると植物が焦げた匂いが充満する広間から退出して、一時の休息に向かった。

つづく